

国鉄闘争総括への基本視点

『社会通信』満三十五歳から

『社会通信』は、今号一一三一（十一月一日）号で満三十五年となりました。創刊は一九七七年十一月一日でした。「まさか三十五年も続けられるとは」が編集子の率直な思いです。創刊当時、口さがない友人は「いつまで続くか楽しみ」など激励してくれましたから。この三十五年の間に政治、経済、社会、思想とりわけ社会主義運動、労働運動になが起きたかは『通信』で発信し続けてきましたから、くわしく述べる必要はないと思います。

『通信』の二十五年で唯一自慢できることは、労働戦線再編成、政界再編成そして国鉄分割民営化といった社会主義思想そして労働者思想を根こそぎにしよとすると独占資本の攻撃に、小さいけれど大きく貢献できたこと、定期発行を守り続けられたことです。一人編集者が『通信』の持ち味ですから、これだけは胸を張ってよいと自讃しております。

「これからどうするか」が楽しみと悩みです。そんな時、学習会仲間は「国鉄闘争の総括や資本主義の仕組み、独占資本の動きと労働者の闘い等に関する、単行本の発行を期待したい」。大きな宿題を負わされてしまいました。

編集子は向坂逸郎先生や岩井章、灰原茂雄さんを先生に社会主義、階級的労働運動のあり方を日々の学習とたたかいの中で学んできました。向坂先生の諸著作は目にするかぎりすべてに目を通しました。我が書棚に先生の著書が百冊超も。

向坂先生はよく「困った時にはマルクスとエンゲルスに相談すればいい」とおっしゃっていました。編集子は科学的社会主義の思想が混乱の極みにある今、向坂先生の諸著作を引っ張り出して読むように努力しています。先生の本はいつ読んでも新しいんですよね。先生はつねに労働者を念頭に「だが、なんのために」、難しくいえば「階級及び階級対立」の視点から書いていらつしやるからでしょう。

諸報道機関は毎日のように独占資本の集中と合併を報じています。他方ではユーロ危機だ、中国・インドといった世界の成長センター経済成長に陰りが見られる、と。独占資本の矛盾の拡大は天まで上がる勢いです。日本では過剰生産が一般化してしまつたのです。よくいわれる「失われた十年」デフレとはガラガラした恐慌、慢性的恐慌状態に他なりません。

中国や韓国、台湾はこの二十年間に日本の高度成長をしのぐスピードと規模で生産力を拡大しました。ここでもまた過剰生産が世界的規模での恐慌となるだろうことは必至です。生産される富は資本主義という器、生産関係とはまったく相容れなくなつたこと以外のなにもありません。

編集子は一九七〇年代はじめから国労を先生に労働運動を勉強しました。反マル生闘争、反合研運動、スト権スト、国鉄分割民営化攻撃への闘い、分割民営化と二十三

年の闘いとなった国鉄闘争等々です。

国労闘争団員は国鉄闘争終結から二年を経たからでしょう、「これまで明日どうするか、来月は貸付金が出るか、来年はどうなるんだとの切迫した毎日だった。今、その総括をどういう視点から行うかを考えさせられている」、「なぜ二十三年間もたたかい続けられたのか、不足したものは何だったかを明らかにすることがこの闘争を闘い抜いたものの責任です」、とのお便り等をいただくようにもなりました。

総括に向けた書物は闘争団を中心にすでに数多く出されています。そこで強調されていることは「国鉄の職場で働くこと、国労組合員としての誇り」、「国労の存在と国労への愛着」を背景に「プール制がとられ維持され続けた」こと等々です。また、この闘いで勝ったのか負けたのか「迷っている」とも。

国鉄闘争への総括の基本視点については、「勝ったか負けたか」ではなく、二十三年もの間、戦い続けることができた国労への愛着と国労組合員として誇りが、国労運動発展のなかでどのように形づくられてきたのか、当事者たちが、なにを目的に国鉄闘争を闘い続けたのかを振り返り、一人ひとりが総括の視点を明確にすることにありと思われます。とりわけ重要なことは共産党宣言の「ときどき労働者が勝つことがあるが、ほんの一次的にすぎない。かれらの闘争の本来の成果は、その直接の成功ではなくて、労働者の団結がますます広がっていくことである」という指摘ではないでしょうか。

国鉄闘争総括への重要な示唆を与えたのが国労大会での元青年部長・国労議員団長の池本柳次氏と国労弁護団長・宮里邦夫さんのあいさつです。池本氏は「国労は、労働者のものの見方・考え方をしっかり学習することで大きくなってきた」。宮里氏は池本氏の発言を受けこうあいさつしました。

「池本柳次さんがごあいさつされる中で、『政治、経済、文化、権利、そういう問題についてきつちり学習することが重要だ』とおっしゃいました。私も一九六八年から国労弁護団に入って、ずっと国労の歴史を見ていて、国労ほど学習する労働組合はないと、ずっと思っていました。そして学習をしている組合員だからこそ、職場に団結をつくり、職場の労働運動の担い手になれたと思っております。

私なりに理解すると、組織を拡大するということは、一人ひとりがオルガナイザーになるということだろうと思います。オルガナイザーになるためには、何が必要なのでしょう。単なる心がけだけではないと思います。ある意味での力量だろうと思うんです。組織を拡大するための組合員の力量。その力量は何によってつけられるか。基本的には、やはり学習、そして運動、そして学習、このことによって、一人ひとりが組織拡大の担い手となるオルガナイザーになることができるのではないかと思えます。」

こんな学習、そしてたたかいたが国労と国労組合員であることに誇りを醸成し、二十三年ものたたかいたがの原動力となったのです。

もつと学習を　そして社会を見る眼を

―反合研ニ支部交流会のとりくみ(学習を中心に)―

反合研(学習会)は、賃労働と資本の階級対立という立場から、職場・国労・社会に対する現状認識を一致させ、自分が何をするか考える場所であり、一人ひとりが自立した運動を各自の職場・機関で行ない、それを突き合わせ、励まし合う場である。自分の階級意識を高め、同志的な人間的繋がりを強める場でなければならぬ。

基本に、科学的社会主義の学習を置かないと、方向性にぶれが出ると思う。三支部交流会は、そこまで学習にこだわれないが、国労東京の運動を作っていくのは自分たちだという自覚、支部を越えた同志意識の形成の場にしたと思う。

最近の国労の会議にはこうした階級的視点がないので、運動方針も、毎年変わらぬ「仕事総点検」と「組織拡大」のオンパレードとなり、「情勢」は貧困と格差を語りながらも方針に反映されない枕詞になる。もつと短い方針で充分だが、運動がなくなる替わりに、「会社の動向」が長くなる、という協調型労働運動の一般的法則があらわれる。我々の運動の不十分さは何か。決定的な学習不足だと思う。

これまで国労の各機関・分会を担ってきた諸先輩が卒業していなくなり、今や、彼らの指導のもとでなんとか「一般組合員」を務めてきた、運動経験の少ない組合員が分会を担わなければならなくなった。従って、機関が「組織拡大だ」と号令をかけても、職場では、組合員が国労(労働組合)の大切さを若い人に言えない、職場で起きている事におかしいと言えない、あきらめ、批判の気持ちの欠如からくる会社施策への追従(試験や増収)、分会集会も署名アンケート集めも情報配りもできないという。

「職場に労働組合がない状態」になっていないだろうか。学習は資本主義の仕組みを知り、社会を見る目を養う。例えば、会社はなぜ契約社員を増やすのか、労働力のジャストインタイム、東北キャンペーンの目標達成のために会社はなぜ、社員旅行を急に企画し参加を慫慂(しようよう)するのか、管理者も競争させられているし、社員に会社意識・増収意識を植え付ける、政治はなぜ原発再稼働・消費税増税へと動くのか、マスコミはなぜ尖閣に「日本固有の領土」という枕詞をつけ「領土を守る」ことを煽るのか、橋下維新の会はなぜ労働組合を敵視するのか等々。

まずは自分たち自身が、科学的社会主義や労働運動の歴史などを学習したい。そして、組合内の学習に結び付けたい。組合内では、まずは最近話題の労働協約・就業規則、派遣法と偽装請負、労働時間と時間外労働など労働法の基本がいいと思うが、講師に上部機関の役員だけは避けるべきである。その点では、七〇〇八〇年代には多かった、活動家が一人で勉強できるような本が必要である。『科学的社会主義』『社会通信』を皆が購読する必要がある。気持ちの上でのアセリがある。国労と日本はどこへ行くのだろうか、橋下・原発・ナショナリズムと排外主義の危険。身の回りの人に伝えたい。自分は何もできていないが、何とかしなくちゃと思う。もうひとつ、反合研と三支部交流会に必要なのは、人を集める努力である。金太郎飴では前へ進めない。さらに、我々に残された時間がない中では、一つ一つの会議・学習会を大切に、中身を改善するしかない。そして、分会の活動家を育てることに集中したい。(国労・M)

反原発闘争に背筋を入れる待望の書発刊！

―原野人著『確かな脱原発への道 原子力マフィアに勝つために』―

日本を代表する反原発政策最前線の担い手で、私たちの反原発闘争の旗手・原野人さんが満を持して著された。『原子力マフィアに勝つため』の指南書である。あれこれの脱原発本にはない、原発（事故）問題の根源と敵の所在について、原子力マフィアとそれを動かす日本独占資本にあることを完膚なきまでに解明した、反原発闘争にぴんとした背筋を入れる、類書にはない待望の書である。

原発労働者と下請け制度

本年十月六日大津市内で、滋賀県で反原発を闘う私たちは報道写真家・樋口健二さんを招いて集会をもったが、「隠された被爆労働者の実態」と題して、樋口さんは滋賀県内の被差別部落から原発で働いていた労働者の写真や、七十七年の敦賀原発での黒人の労働者の写真をスライド上映した。

被曝した被差別部落のその労働者は「原発ブラブラ病」と言われた初めての人で、昨年亡くなった。また黒人の被曝労働は樋口さんらが国会で取り上げさせ闘い、直ちにやめさせたがたくさんアフリカから連れてきていた。

「放射能の半減期は二万四千年もある。被曝労働は特に日本が一番ひどい。それは下請け制度があるからだ。電力会社は一人五万円支払っているのに、当事者にわたるのは一万円で、八千五百円の例もある。」

八八年には京都北部・福知山で十八歳未満の少年が高浜原発で三人労働などもこなばかげたことはない。滋賀県・嘉田知事も大飯原発再稼働反対とかつこよいこと言っていたのに、大阪橋下市長によってころつとかわる。だからじめのような問題も起こる。」と、昨年の三・一一まで四十年間困難な中被曝労働を撮り続けてきた闘いを報告された。

原野人さん

それは「人の命を何だと思っている。ボロ雑巾と同じく考えているのか」という四日市公害以来、「売れない写真家」として日本独占資本を告発し続け、「これで文化国家といえるか」と事実を突きつけてきた強靱な魂であった。「七十年代に原発反対したのは一党しかなかった。社会党である」と正當に運動体の歴史的評価もされた。

その七十年代日本社会党の反原発闘争方針確立・運動推進の立役者が原さんである。七一年社会党政策審議会入局、七二年第三五回党全国大会で原発関係一九県共同提案の「原発と再処理工場建設反対運動推進決議」の満場一致採択を勝ち取った。

以来、社会党・総評ブロックあがての県評・地区労・原水禁・住民組織をまきこんだ全国闘争が展開される。また党内に自治体議員中心の「原発対策全国連絡協議会」も結成され、八十年代に労戦右翼再編とあいまって進行された日本社会党の基本路線やエネルギー政策右傾化との闘いの根拠地ともなっていく。党建設研究全国連絡協議

会や護憲ネット、そして新社会党の旗揚げまで直接・間接に反原発闘争の地方・地域の担い手が中核となっていく。その運動の中心の担い手・頭脳が原さんであった。

原さんは京都大学での冷遇も省みず連日反原発講演会に東奔西走される小出裕章さんのお話しを「あとがき」で書かれている。「売れない写真家」と言い、おなじみ「売れない小説家」という方もおられるが、幼子二人抱えながらも東京大学を出て大企業エリート研究者の道を捨て、「公害のわかる求人」で日本社会党の運動に飛び込まれて四一年の著者、渾身の一冊といえよう。

独占資本の大罪

この著作の特徴は六点である。

一つには、今次福島原発事故を「新自由主義によって変容したものの、国家独占資本主義の一つの典型的事業」であると電力資本にとつての原発を位置づけ、「原発を麻薬とするマフィアの親分である独占資本を孤立化させること、さらにはこの収奪者を収奪して市民の手中に奪い返すことが必要」と喝破していることである。

かつて日本を代表するマルクス経済学者であった向坂逸郎氏と原さんは『日本独占資本と公害』を共著として世に問うた。マルクス『資本論』の翻訳者であり、六十年三池闘争の指導者でもあった向坂氏は原さんを本当に才能にあふれた人物と評価され、この当時新進気鋭の研究者・活動家と共著出版をされた。

二つには、事故にあった福島原発を科学者としてたいへん心配されていることである。私たちにわか反原発運動家では及びもつかない専門家としての指摘が適確になされ、野田政権の「冷温停止」事故終息宣言などは論外としても、自治労・日教組などはこんな荒唐無稽とも言って過言でない民主党・野田政権と決別すべしとも提起されている。

三つには、今の地球の歴史上の位置をミニ氷河期の入り口ととらえ、その立場からも原発を即時停止し、火力発電を全開しながら自然再生エネルギー、とりわけ風力発電開発を急げと説く。

四つには、原発問題の根源を「原子力ムラ」ではなく、「原子力マフィア」ととらえ表現して告発されていることである。これは著者に再確認していないが、ムラというような牧歌的なものではなく、被差別部落への差別を助長しかねない日本人の「〇ムラ」表現は良くないし、当たらないという私の進言が生きたとしたら、密かに誇りとするところである。

五つには、反原発闘争は一定年月すぎたら運動がさたやみするあれこれのこれまでの闘いではなく、私たちの運動の中味をそのスタイルを、生き方さえも変える闘いだということである。そのことの指摘である。

六つには、この間の電力会社になりかわった東京電力労組や関西電力労組の「脱原発に署名した」民主党代議士への圧力事件は論外だが、社民党と共産党と新社会党が、そして緑の党なども含めた、原子力マフィア・日本独占資本を孤立させ打倒するための共同闘争、共同戦線を提起されていることである。

「必要なのは党の合流ではなく、共同戦線だ」。「この二政党（共産党・社民党）が

共同しようとしないうところに、市民の政治不信の一因がある」と。「広島と長崎と福島
島の悲劇をこれ以上くりかえさせないために」と。

(二〇一二年・一〇・一二、稲村 守)

原野人著 『確かな脱原発への道』のすすめ (編集部より)

本書は、第一章 原子力マフィアの実像 第二章 悲劇を繰り返させないために
第三章 事故から一年で明らかになった問題と脱原発への課題 第四章 重大事故の
現状と原発のない社会への道 第五章 立ち遅れた市民の政治部 の五章からなつて
います。

始章「原子力マフィアの実像」の構成は「①原子力マフィアの誕生、②マフィアは
ずるがしこい、③マフィアの親分(ボス)たち、④原発になぜこだわるのか、⑤とび
きりの妙味、⑥電気料金は世界一、⑦高レベル廃棄物の行方、⑧原爆二百個分の灰、
⑨マフィアの誘導」。

稲村氏がすでにくり返し強調されておりますが、この本の最大の特徴は、科学技術
の発展が資本主義社会のなかで自由に発揮されれば、労働者・国民にどんな影響を与
えるか、これはフクシマに明らかです。メディアは原子力共同体を「原子力ムラ」な
んで、封建時代の部落共同体のように牧歌的に描き出し、矛盾解消、犯人隠しに大童
です。今は「ムラ」社会はありません。「ムラ」を壊滅した独占資本。原さんは「ム
ラ」に対し、「原子力マフィア」と対置します。現代資本主義のあり方そのものです。

これまで私たちは、一千万人署名を皮切りに、中央や地方で集会や勉強会を組織し、
「廃炉・再稼働反対」の自治体決議や裁判闘争にもとり組んできました。子どもの健
康を心配し身体を張って闘う若いお母さんたちの頑張りが大きな力を発揮しました。

最終章「立ち遅れた市民の政治部」は「①梅原猛さんの文化人批判(巨大化した資
本主義災―独占資本災、核エネルギーの平和利用と不破哲三氏、『半体制的文化人』
とわれわれの考え方)、②共産党の以前の基本方針、③社会党と社民党と新社会党、
④脱原発諸党の共同を迫る福島の悲劇」。

このたびの原野人さんの本「確かな脱原発への道―原子力マフィアに勝つために」
は、まさに、稲村さんの書評にありますように、たたかう私たちの、時宜を得た待望
の書「原発政策最前線を担った著者渾身の一冊」です。一読されれば、そのデータの
分析に、また政治の方向性にも納得し、明日への指針を得て自らのたたかいに確信を
持たれるに違いありません。 『新潮社』発行 定価 一八〇〇円十税)

※ 申し込みは、FAXかメールで「社会通信」へ

税込み送料込み 一八〇〇円でお送りします。

FAX 03-3299-5367

メール shakaisushin@nifty.com

日本の民族文化とその形成

― 民族と国家 階級（三） ―

「天皇制」

民族国家の権力も永遠に続いてきたわけではありません。保守主義者は「日本は天皇が知らしめず神の国」といつて恥ずるところはありません。天皇が日本を治めていたのは大和朝廷時代のほんの一時期にすぎません。平安時代は貴族階級の藤原、そのなかで武家階級の平家が貴族階級を抱き込み、鎌倉時代から江戸時代は武家階級が権力を握りつづけておりました。

天皇が歴史に再び登場するのは明治の御維新以降にすぎません。薩長土肥政権の「玉」として、さらには「絶対主義的遺制、金融独占資本政治支配を強化するためのかいらい」（同、一四頁）という社会、歴史の発展に明らかです。

民族と同時に国家とはなにか、国家は階級的支配の権力機構です。保守主義者たちは民族、民族性を強調することによって、階級対立の存在を弱め、あわよくば葬り去りたいのです。たとえば、他民族と対立する場合に生ずる民族感情、国民としての共感を政治的に利用するといったようにです。

民族性と民族文化

歴史・伝統・文化はこうして形づくられていくのです。この歴史過程・日本の特殊性について向坂先生はこう述べています。

「一定の社会的条件の下では、必ず資本主義が成長する。中世はまた必ずその体内で資本主義の条件をつくりだしている。この事実は世界中どの国に行っても変わらぬ。したがって、どこの国に行っても、それが大きな民族であれば、必ず中世があり、中世の崩壊の過程があり、資本主義がある。それは決して外国の模倣でできるものではなく、その社会の体内にあたえられた条件によるものである。だから、日本には日本の特殊な民族性があっても、それはたとえば、資本主義の存在を排除しうるものではなかった。ロシア、ドイツみなそうである。」

中世あり、中世の崩壊過程があり、近代資本主義があるとすれば、それぞれ、これに対応して、中世の文化、その崩壊過程の文化、近代的文化等があるのも当然である。ただ、中世のあり方、その崩壊の仕方、資本主義の態容、そういうものは、民族の異なるにしたがって、異なっている。それは、それまでにその民族がつくりだしていた性格によって、それぞれその特殊性をもってあらわれる。

言葉や文字や地域の同一性から、それらの人びとの間におのずから一定の意識ができてくる。しかし、これらの意識は現実はその民族が経済し、法律し、戦争し、文化し、等等をやっているうちに、これらの内容をもった意識である。だからある時までにできている社会生活と文化とのなかに、その民族の特殊性があらわれているのであって、抽象的に民族性というものをつかみあげてみせることはだれにもできない。さ

らに、また、「民族性はこのような社会発展の過程に、その時時の現実の姿であらわれているのであるから、社会が変化し発展するとともに、民族性なるものも変化し発展する。」

「東洋の小島の日本民族は、世界歴史の永い期間にわたって、その仲間の外にあって。相交錯し、相競っている世界から、その抗争の圏外に忘れられていた。わずかに黄金の国として時時夢のように思い浮べられていただけであった。だから、ここでは中世がながくつづいた。細かに中世を完成させた。」

中国大陸から文化を時時吸収していた。仏教も中国を経て受け入れた。中国文化を、日本民族の中世的社会構造とその生活のなかで、小さな胃袋で自分なりに消化していた。これが日本の民族性として近代日本に受けつがれたものである。だから、今日われわれが、資本主義発展とともに、世界の協力と抗争のなかにはいりこんだ時、われわれの民族性の形成もちがった方法でおこなわれはじめた。

中世の夢をながく見つけ、そこに規模の小さい、しかしながい間かかってつみあげた民族性をつくっていたことと、遅れて世界資本主義の舞台にはいあがったことのために、未だに、狭小で皮浅で、ちょっぴり気の利いた、しかし深刻さを欠いた『民族文化』しかもっていない。ひとまねをこととする、公式と教科書と抽象論を愛好する気質しかつくりだしてはいない。しかし、人びとは変化しつつある。」

こうしてつくられてきた日本文化の歴史的伝統が、平安期の花鳥風月に徴表される「ものあわれ」で、芭蕉や大雅に代表される「わび、さび」といった風流的な隠棲の思想に他なりません。そして明治から昭和へ、昭和から平成へと生産力の発展とともに、日本の文化、生活様式がものすごい速さで大きく変容してきたことは、だれもが目にしてきたし、していることです。

保守勢力と民族主義

民族性と民族文化は変化しつづけます。そうであるにもかかわらず独占資本の政治代表である自民党は「天皇は日本国の元首であり、日本国及び日本国民統合の象徴」、「国旗は日章旗、国家は君が代」（自民党第二次憲法改正草案）といい、民主党は自民に負けてなるものかと「天皇制のもとで古今東西の文化を融合・発展させてきたわが国の特性にさらに磨きをかける」と極右反動政治への道をひた走ろうとしています。自民党総裁になった安倍氏は尖閣や竹島の小さな島が日本民族の生命線であるかのようにドラ声張り上げるばかりか、日本を「美しい国」と抽象的かつ感情的に表現し、「家族、ふるさと、かけがえのない日本を守る」ことと、階級対立の存在を民族、民族性に解消しようとし死です。

彼らがめざしたいとする日本の歴史・伝統・文化とは、このように天皇がしろしめす国家、その下での歴史・伝統・文化と民族に他なりません。日本史をひもといてみますと、庶民にとって天皇が元首、象徴であったことは近現代史にはほとんどなかったといって過言ではないにもかかわらずです。

われわれ労働者は国際主義者です。経済的に、政治的に、文化的に各民族は互いに対立し、排他的である理由はありません。対立しているのは、資本の力で他民族を制圧することによって特別の利潤を獲得しようとする資本の間だけです。だから向坂先生は民族文化についてこう述べています。

「支配階級は、民族文化を自分に好都合なかぎりで護ろうとする。日本民族の文化のなかから反動的で、日本民族が世界の市民であることを自覚させないような側面を保つために、民族文化を強調する。民族的対立によって利益を得ており自らの地位を保つからである。

われわれは、民族文化のうち勤労者のつくったもの、すなわち、勤労者の民主主義的精神のあらわれであるもの、国際的協力を可能にし、国際的に通用しうるもの、このようなものを守ろうとしている。われわれは、先進的な文化をわれわれのあたえられているものと融合させている。両者に融合できる部分があるからできるのである。それはわれわれが無意識にやっているところである。これを意識的にやることもできるし、意識的にやらねばならぬのである。」

最後に領土問題についての基本視点については、エンゲルスは一八五九年に公にした『ポーとライン』という小冊子の中で「ヨーロッパの地図が決定的に確定していることをだれも主張していない。すべての変化は、それが継続するかぎり、全体として大いに生存能力あるヨーロッパの国民に、言語と共感の情によって決定せられる真の自然的境界を与える傾向にならなければならない」と述べています。

脱原発自転車ツアー 十七万集会

市長選以降も以前と同様、元気に街頭や市民運動、ブログなどの発信にと活動しています。この夏「子どもたちに原発のない社会」をと、東海道を「脱原発で行こう」ののぼりを背負ってサイクリング。遠出は茨木と鹿児島を往復した十九歳の時以来で四十年ぶり。脱原発をアピールして東京に無事到着、十七万人集会や多くの出会いを楽しんできました。

さて政治の世界は小選挙区の導入以来、悪くなる一途。自公民が談合して消費税増税と末期症状です。選挙を前に、自民や民主の自分第一議員が「維新」の名で有権者をごまかそうと躍起です。かつて「小泉」で自民が、「政権交代」で民主が大勝ちしました。しかし熱が冷めて待っていたのは貧困格差と裏切り（辻元清美氏も増税賛成）でした。「熱狂」は「熱く狂う」こと。またもやマスゴミは「熱狂」を演出して国民を地獄につき落とすのでしょうか。

その維新が腹痛の安倍元首相を担ぐとか。自民、民主、維新の一体ぶりに「お主も悪よのう」、「いえいえ、お宅ほどでは…」のセリフが浮かんできました。悪代官を懲らしめるのは誰でもありません。私たち一人一人です。「生命とくらし」のために動きましょう。

（山下 けいき）

新自由主義批判の合唱

―労働組合強化への根本問題(五)―

連合 労資ゆ着

司会 ナショナルルセンターの連合、全労連、そして全労協の動向はどうですか。

Aさん、連合の大会は二年に一回、昨年大会を開いているから今年はない。六月そして十月はじめに中央委員会が開かれていますよね。連合の中心テーマはなにか。

A 最大の関心事は大きく三つ。一つは一年以内に必ずおこなわれる衆・参院選への対応、二つは組合員は減る一方ですから組織拡大、とりわけ「一千万連合」実現、三つは「働く者を軸とする安心社会」建設をめざす一三年度活動計画です。

連合は日経連(現・日本経団連)とともに政界再編を推進し民主党をつくり、民主党最大の支持基盤となった。連合はこれによって権力政党の一員となりました。ですから昨年大会は政党との協力関係のあり方について一四年度大会で見直すことが提起された。しかし、その構想実現は困難になったんじゃないか。

民主党は求心力より遠心力が強まっている。中央委員会では連合会長は「離党・与党分裂は遺憾。民主党らしさを示せ」と吠えてたよ。さらに「分厚い中間層をつくれ」ともね。資本主義社会で「分厚い中間層」なんてできるわけない。

連合の現在最大の特徴は権力者でもないのに権力の一員として行動発言していることだ。連合の基本路線は権力政党・政府はむろん非共産勢力と仲良くし、政策・制度要求にもとづく産業・企業政策を実現したい。その方針が一三年度活動計画です。そこでの大きな柱は大きく六つ。

第一は復興・再生に全力をつくし日本全体の再生をめざす、第二は連合がめざす社会像「働くことを軸とする安心社会」の社会的浸透、第三は正規・非正規を問わず、すべての働く者を対象とした処遇改善と底上げの取り組み強化、第四は一千万連合を展望し、社会的インフラとしての労働運動推進、第五は政治改革推進、第六は公正なグローバル化を通じた持続可能な社会の実現がいわれる。

労働組合は「社会的インフラ」、「公正な」グローバル化、「働くことを軸とする」なんて文々は資本と賃労働の対立、資本間―それも巨大な独占資本―の仁義なき競争と労働者への窮乏化という帰結を覆いかくすだけだ。

B 先日どこかの新聞に、「トヨタ労組 国内事業単独で二〇一三年度には黒字化めざす方針決定」とあった。なんだこれはと目を通したらトヨタは四年連続で国内事業は赤字だから、「国内三百万体制を維持し、雇用を守るため組合員が力合わせたい」てんだ。企業の方針がそのまま労組の方針となってるんだ。

「分厚い中間層」

司会 十月はじめの中央委に野田首相が来賓で出席し、古賀会長とともに「分厚い中間層をつくる」とあいさつした。「分厚い中間層」ってなんなのかしら。

A 昔、一億総中流がいわれたよね。資本主義社会における資本の蓄積、集積、集中

は都市と農村の対立―地方の過疎化―を生み、資本の生産性向上に機械が人間を喰う傾向を必ずもたらす、いわゆる産業予備軍の創出ね。労働者はいらなくなる。彼らはさまざまな層の不安定雇用労働者におとし入れられる。それが非正規といわれる労働者群の増大なのに。

今、「分厚い中間層」云々が強調され始めたのは、独占資本家と彼らのグループ高級官僚、政府の危機意識の現れだ。だから今年の労働白書である『労働経済の分析』は、副題を「分厚い中間層の復活に向けた課題」としている。

白書に「中間層」とは何かについて定義はありません。読みとれるのは中間層とは賃金生活者、労働者階級らしきことを頭においているらしいということだけです。

司会 Cさん全労連、全労協はどうですか。

全労連大運動

C 「反連合」を旗印に総評から分裂してつくられた全労連は、連合の後追いの傾向を強めている。すでに課題で述べたが組織拡大がそうね。非正規労働者急増への対策としての非正規センターも同じだ。闘争方針も抵抗より参加に重点がある。

全労連はスローガン「憲法をいかしつくりよう」 “安全・安心社会” すすめよう 対話と共同の組織拡大”。大会は二〇一二―一三年度の方針として「安全・安心社会をめざす大運動」（全労連大運動）を決めた。

全労連大運動の柱は二つ。一つは大企業中心、経済効率の軽視をめざす国民共同の闘い、当面は「原発ゼロの日本」をめざす。二つは「四つの挑戦」、課題として①労働者の実態の「可視化」、②実態の改善、③制度改善、④総対話と共同があげられる。そしてもう一つの大きな柱が「一五〇万全労連」を達成したい。

全労協 「新たな基調と目標」検討

C 元気と活力にあふれた大会だった。全労協傘下の組合、地方組織は争議組合をかかえ毎日が闘いの連続だ。基調は七つの柱からなる。

第一は震災復興への支援・連帯、その中心は反原発、第二は新自由主義から転換、第三はJAL不当解雇撤回等の権利を守る闘い、第四は公務員制度改革との闘い、そしてこれからの闘いを土台に第一に護憲平和、脱原発社会の実現、第二に全労協の発展・組織強化・拡大。

司会 全労協はこれまで国鉄闘争を中心に運動が組まれていた。国鉄闘争が終結してこれからの全労協運動はどう構想されているのか。

A いま、「路線組織検討会議」で論議がおこなわれているとの中間報告があった。これまで六回おこなわれ次期大会で成案を得たいとのことだ。これまでの議論では①目的と検討事項の確認、②日本の労働運動の現状と課題、③資本の動向、④産業政策と労働構成、⑤公務、公共サービスに関わる労働の変遷が検討されたとのことだ。

あと一年論議し「新たな基調と目標」が定められることになる。

公務員制度改革に抗し

司会 自治労、日教組といった公務員労働者組合の状況はどうか。公務員労働者は数百万。全国の自治体にあり、民間大企業の工場のように、隔離された状況ではなく勤労国民と日々ふれあい、話し合い労働している。彼らは行政、社会保障、医療・介護、土木等の専門家でもある。だから、公務員労働者の組合の役割は、民間組合とは違った役割をもつ。

D 自治労を中心に話したい。自治労大会の議案は当面の闘争方針、都市交との組織統合方針の大きく二つ。もう一つ、自治労が力を入れているのは、自治体非常職員の手当支給のための地方自治法改正だ。

司会 前二つは推測できる。あとの地方自治法改正ってどういうこと。

D 私も始めて知ったことだが、現行の地方自治法では常勤職員には給料と手当の支給（二〇四条）とあるが、非常勤職員には報酬を支給（二〇三条の二）とだけされている。彼らに手当支給できるようにしたい。自治体労働者の臨時・非常勤等労働者は約六〇万人、多くが恒常的な業務に就き、地方行政の重要な担い手だが、彼らの賃金実態は多くが二〇〇万円未満、雇用は不安定な「官製ワーキングプア」、これ以上の賃金の切り下げを許さない、賃金底上げをはかるために地方公務員法二〇三条の二などを改正したいとの方策です。

冒頭の委員長あいさつは①公務員制度改革、②非正規職員、③政治、④脱原発社会の実現。政治では民主党の状況を「残念」といい、どうするかについては「私たちが求める政策課題を実現するためには、厳しい批判はありつつも、民主党の再生以外に選択肢はない。次期参院選では現職の高位当選に全力をあげる」

自治体労働者が直面するもっとも大きな課題は国家・地方財政「危機」を背景に賃金・労働条件切り下げ攻撃。大阪維新はここに焦点をしばり人気を得た。もう一つは新規採用がない、民間委託の拡大等で組合員数が減り続けていること。現場は要員不足、労働強化、そんな中での賃金低下に悲鳴を上げる。大会では四二人が発言している。多くがそれだ。

組織は、登録人員が八〇万人を始めて割り込んだ。どの組合も共通しているが、組合運営にも大きな影響を与えはじめているから、組織拡大は待ったなしの重要課題だ。

司会 自治労大会では「新自由主義的な『構造改革路線』と一線を画す」が、大合唱となったとも聞いている。

D 司会がいったのは委員長発言、来賓あいさつは六人、連合会長は「社会の歪みは許容範囲を超えている」、民主党幹事長は「新自由主義的な政策と決別」、社民党副党首は「総選挙では反自由主義政治を明確にし、全力で闘う」と。

国民生活が第一の党首、政界再編を主導した小沢氏ですら新自由主義反対のよう。新自由主義について、みんな考えていることがバラバラ。先日、ある集会で主催者は新自由主義は破綻したと大演説していた。ある集まりでは破綻したけれど再び盛り返している、さらには新自由主義はまだしばらく続くといったようにだ。

司会 日本労働運動はかならず新たな再編成期がくる。賃労働と資本の対立はなくなっていない。労働組合は絶対になくならない。日本、世界の労働者運動の波は大きなウネリとなる。

◇ 読者からのおたより ◇

貧乏神 台風が季節が終わっても 増税の嵐が待っている。こっちの方がもつと恐ろしい。吹き始めたらもう止まらない。秋になっても暑い暑い。ふところは寒い寒い。呼んでもないのに 貧乏神がやってくる。
(神奈川・O)

編集部より 友人からお送りいただいている文集から目についたものです。
仲良く活動 国労東京で活動されていたKさんと共に、明石総支部で機関紙担当をしています。
(神戸・M)

編集部より カンパありがとうございます。Kさん友人です。読書家です。
入院 体調をくずして入院していました。納入でご迷惑をかけました。
(鳥取・T)

編集部より なにか集まりの時、Tさん欠席。「どうかされたの」に、「体調くずされている」。心配しております。回復に安堵です。小生、友人たちと長野県蓼科での勉強会でギックリ腰。飲み屋ならぬ医者をはしごする昨今です。

カンパです 誌代一年分+残金カンパ。いつも遅れてすみません。

編集部より カンパに感謝。本誌は今号で三十五歳を迎えました。これまた感謝です。

エルダー出向 送金遅れてすみません。エルダー出向、たいへん厳しい労働条件のなか、がんばっています。六十五歳まで大丈夫かな？
(神奈川・T)

編集部より 先日、仲間の勉強会で「ぼくは六十という数字がきらい」。なぜに、「あと半年で定年、エルダー」。国鉄への愛着を感じさせられました。

活用 誌代六ヶ月分。送料代は納入しなくてもいいのでしょうか。活用しています。
(長崎・M)

編集部より 送料は誌代に含まれています。ですから必要ございません。編集についてのご意見いただければ嬉しいです。

慌ただしい 政局、外交ジタバタしています。私もまだ落ち着かなく慌ただしい毎日をごすごしています。
(鎌倉・I)

編集部より 新居の住み心地はいかが。まだ整理ついてないようですね。

怒りは選挙で 民主・自民の原発推進者たちは、原発といいながら、国民の生活を守るといいながら、再稼働を認め、建設を認めている。そして大衆収奪の消費税増税を決めた。本当に腹が立つ。
(千葉・S)

編集部より 原野さんが『確かな脱原発の道―原子力マフィアに勝つために』を出版されました。書評にある内容です。原発をなくす運動は長くなります。それには基本原則を一人ひとりが識る必要があります。ぜひ一読を！

「維新」いらぬ 「維新」はいらない。「革新」が欲しい。労働者・労働組合が静かすぎる。消費増税は国のいじめ！
(北海道・S)

編集部より 「維新」にカゲリが、「通信」の見通しの通りです。今はその時に踊らされず、じっくりと情勢全体を考え行動することです。

非武装・中立 全国の米軍基地反対！オスプレイは武器であり、事故が問題でなく、非武装・中立に反するために反対！
(福岡・K)

編集部より 憲法前文、九条は「戦力」をもとないことをいつている。武器はむろん自衛隊は戦力です。

国体閉幕 天皇がきたり、秋篠宮がきたりと、騒がしかった。岐阜国体が今日閉幕し、やっと静かになりそうです。(県費一五〇億円以上つき込んで…)。きょう、原野人さまから新刊本を頂きました(『確かな脱原発の道』です)。ニュースを同封します。(岐阜・K)

編集部より ニュースありがとうございます。原さんの本、大きく広められればいいですね。

第四九回三池大災害抗議集会

◇日時 十一月一日(一三時)〜一五時三〇分、◇場所 荒尾シティモール2Fホール

◇テーマ 「三池・水俣・福島・沖繩」、◇特別講演 熊本学園大学教授 宮北 隆志

◇主催 実行委員会

※多数のご参加のお願いします。尚 参加費は無料です。

※故三村、原田医師による(三池CO中毒検診医師団) 大牟田労災病院機能存続のための医学的意見書の小冊子は連絡会・当会の事務局で一部五〇〇〇円で販売しています。